

NINJAL オープンハウス 2021

定住外国人の日本語習得と言語生活に関する縦断的研究
～学習者の高齢化、言語摩滅・消失の過程に注目しながら～

野山 広 (国立国語研究所 日本語教育研究領域)

1. はじめに: Welfare Linguistics的な観点から、研究のためだけの調査というよりは、地域の需要や要望に応えた調査を目指して、現地に定住する外国人学習者に対して、OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用したインタビューを約14年間 (第1期: 2007年～2009年, 第2期: 2009年～2012年, 第3期: 2013年～, 第4期: 2018年～) に渡って行ない、形成的なフィードバックをすることで彼らと寄り添いながら、学習支援を展開してきた。その成果として、インタビューの文字化データと共に、特に、韓国出身の複言語話者に焦点を当てる。彼女は70代になり、言語習得から摩滅へと変容し始めた。その言語生活情報やインタビュー後のフィードバック情報も含めた分析結果や、ネット上に公開した**日本語学習者会話データベース 縦断調査編** https://nknet.ninjal.ac.jp/iudan_db/を基に、その報告と今後の展望を行う。

データベースの概要: 散在地域 (A県B市), 集住地域 (C県D町) において、日本語学習者に対する縦断調査を実施した成果である。OPIの枠組みを活用した日本語学習者とテストの会話を文字化して、会話能力 (初級～超級までの10段階評価) の評価情報や関連情報とともに提供⇒ 例) 約30人分の2～5年間の縦断データ: **5年間のレーティング結果**

表1. 外国人散在地域の話者のOPIレーティング							
学習者	母語	職業	一年目	二年目	三年目	四年目	五年目
B1	ロシア語	主婦	初-中	初-上	中-中	中-中	中-中
B2	タガログ語	主婦	中-下	中-中	中-中	中-中	中-中
B3	タガログ語	主婦	中-上	中-上	中-上	中-上	中-上
B4	中国語	主婦	上-中	上-上	上-上	上-上	上-上
B5	中国語	高校生	上-下	上-上	上-上	上-上	上-上
B6	中国語	高校生	中-上	中-上	中-上	中-上	中-上
B7	マレー語	主婦	中-中	中-上	—	中-上	中-上
B8	中国語	主婦	中-中	中-上	中-上	—	—
B9	中国語	主婦	中-中	中-上	中-上	中-上	中-上
B10	韓国語	主婦	中-中	—	中-上	中-上	中-上
B11	中国語	主婦	上-下	上-下	上-下	上-下	上-下
B12	中国語	主婦	中-下	中-中	中-中	中-上	中-上
B13	中国語	主婦	—	—	中-中	中-中	中-中
B14	中国語	主婦	—	—	上-下	上-下	—
B15	タガログ語	高校生	—	—	中-下	中-下	中-下
B16	英語	主婦	—	—	—	—	中-上

表2. 外国人集住地域の話者のOPIレーティング							
学習者	母語	職業	一年目	二年目	三年目	四年目	五年目
S1	ポルトガル語	大学生	上-下	上-中	上-中	上-中	上-上
S2	ポルトガル語	高校生	上-下	上-中	—	上-上	超
S3	ポルトガル語	高校生	上-下	上-上	上-上	超	—
S4	ポルトガル語	中学生	初-上	—	初-上	—	—
S5	ポルトガル語	高校生	(中-上)	上-下	上-中	上-中	上-上
S6	ポルトガル語	高校生	(中-上)	上-下	上-下	—	—
S7	ポルトガル語	高校生	初-上	—	—	—	—
S8	日・ポ語	中学生	上-上	超	超	—	—
S9	ポルトガル語	高校生	中-下	中-中	—	—	—
S10	ポルトガル語	教職員	中-中	中-中	中-中	中-中	中-上
S11	ポルトガル語	高校生	初-上	—	—	—	—
S12	ポルトガル語	高校生	初-上	中-下	—	—	—
S13	ポルトガル語	高校生	初-上	初-上	中-下	中-中	—

5年間のレーティング結果 (表1 & 表2)

これまでの分析結果から

1. OPIのレベル変化と定住者が必要とする日本語力 (分散地域)

定住者中で特に主婦は、OPIレベル中～上までは向上するが～

⇒ 普段の生活で、上級レベルの日本語会話力は必要なのか

⇒ 個々の話者の地域の生活に必要な日本語会話力とは何か (どのレベルか) について、これまで以上に注目すべきではないか

⇒ **加齢とともに (特に70代になると)、その言語生活の中では、それまでの言語習得から言語摩滅への変容が進むことがある。その変容 (ライフ) を、自分自身も周囲もどのように受け入れて、その認知の症状に応じて、どのように介護をしてゆくのか、その方針を考える時期が到来している。また、バイリンガルの介護福祉士も、やがて必要となろう。**

参考文献:

徳川宗賢(1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」 (対談者 J.V.ネウストプニー) 『社会言語科学』 第2巻第1号 89-100、社会言語科学会

・眞千賀子(2006)「形成的フィールドワークという方法—問いに応える方法の工夫」 吉田寿夫 (編) 『心理学研究法の新しいかたち』 170-194、誠信書房

2. 定住者の言語的な課題と必要な言語支援 (分散)

地域日本語教室や年間の活動への参加等 (正統的周辺参加) によって、スパイラルに生活に必要な会話能力や異文化対応力がついてはいるが、彼らの日本語にはいくつか課題が見られる。

⇒ スタイルの問題, 発音の問題, その他対話方略的な問題

⇒ 主に自然習得環境での学習が多い定住者の課題が浮き彫りになる

3. 日本語支援からコミュニケーション支援へ (集住・分散)

地域の定住者は、ただ日本語の知識を学ぶこと以上に、その日本語を使用した経験知を蓄積する必要がある。換言すれば、十全参加をするためのコミュニケーションの方法やリテラシーについて学ぶ必要がある。

⇒ 地域の日本語教育の充実, 1対1の会話場面・状況だけでなく、多人数会話の場面・状況の経験を持つことの重要性, 教室の在り方再考の必要性

◎ 韓国出身の学習者B10 (50代で来日, 現在70代) の背景、特徴

⇒ 以下の特徴を踏まえると、最近の彼女は、日本語習得の過程から摩滅の過程へと変容し始めていることが推測される。

○ 彼女は50代で来日して滞日期間が4半世紀になろうとしている (嶋田2020)。

○ 現在70代となり、これまでの第二言語としての日本語習得過程が摩滅 (消滅) の過程へと変容し始めている。

○ 彼女のOPIレーティング結果は、2007年度から2012年度までの初期5年間で中級の中から中級の上に変容した。→ 6年目以降は、中級の上のままで現在 (最近のインタビューは2020年3月) に至っている。

○ 彼女は70代になっても、中級の上の幅の中で、その会話力は少しずつ伸びているようであったが、この数年、**日本語 (第二言語) の言語摩滅が始まったのではないかと思われる傾向**がある。

今後の展望: 地域の学習支援現場の関係者との協働の可能性の追究

○ **多人数会話場面の提供と共同研究の実施・展開**

○ 地域の状況に応じた学習支援プログラムの考案

○ 人間関係づくりの基盤としての教室の存在の探究

○ 新たな地域 (例: 他の集住地域, 散在地域等)

における共同研究の可能性追究, 地域比較分析の試み

⇒ **高齢学習者の言語摩滅 (喪失) に関する学際的 = 介護分野, 認知症予防の分野の専門家, 継承語教育の専門家等との連携・協働や研究・追究**

これまでの成果等

- 【論文・著作等】
- (1) 嶋田和子 (2020) 『外国にルーツを持つ女性たち—彼女たちの「こころの声」を聴こう!』ココ出版
- (2) 野山広 (2015) 「地域における日本語教育支援と多文化共生—ローカルな視点から捉えるグローバル・シティズンシップ—」 (特集: 異文化間教育学とグローバル・シティズンシップ) 『異文化間教育』42号 (pp.45—58.) 異文化間教育学会
- (3) 野山広 (2013) 「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究」 『国立国語研究所プロジェクトレビュー』第4巻第2号、100-109
- 【発表】
- (1) 野山広・嶋田和子・山辺真理子・今村圭介 (2012a) 「日本語非母語話者の発話スタイルの特徴と課題—外国人散在地域の定住外国人の縦断OPIデータから—」 2012年日本語教育国際研究大会 (ICJLE, NAGOYA) (8月18日, 名古屋大学)
- (2) 野山広・嶋田和子・山辺真理子・藤田美佳・森本郁代 (2012b) 「散在地域に定住する外国人の日本語習得と言語生活支援の実態に関する縦断的研究—OPIの枠組みを活用した形成的フィールドワークの結果を踏まえながら—」 『2012年度日本語教育学会秋季大会予稿集』31-42、日本語教育学会 (10月13日、北海学園大学)
- (3) 野山広・嶋田和子・山辺真理子・今村圭介 (2011) 「結婚移住女性の言語的特徴と日本語教育支援の在り方に関する一考察—散在地域における4年間の縦断調査結果を事例として—」 『社会言語科学会第28回大会論文集』
- (4) 野山広・嶋田和子・山辺真理子・山口真理子・旗野智紀 (2009) 「集住地域に定住する日本語非母語話者 (日系ブラジル人) の言語生活に関する縦断的研究-OPI (Oral Proficiency Interview) テストを活用した会話データを事例として-」 『社会言語科学会第23回大会論文集』